

SITデスティネーションを探る…ビルマ

—仏教と社会主義の共存をはかる‘静かなビルマ人’たちと懐かしく交わる旅—

近藤節夫（小田急トラベルサービス）

◇ 知られ始めたビルマ

「知られざるビルマ」（大野徹著）という書物が、ビルマを紹介する唯一の参考文献ともいえた十年前に比べれば、諸外国に引き比べて相変わらず多いとも思えないが、まあ幾冊かの文献も出版されたし、この国自体が、マスコミの記事となって紹介されることにより、近年‘多少知られざるビルマ’程度にはなった。しかしながら、依然として多くの点でこの国は、未知で不可思議で、それゆえにこそ神秘的な一面を持っていることも事実である。

今日「ビルマ」という国について尋ねられて、まず頭に浮かぶのは、仏教の国、信心ぶかい人々、ビルマの豎琴、首都ラングーン、大東亜戦争、インパール作戦、ネ・ウィン大統領、ウ・タント元国連事務総長……。まあ、ざっとこの程度しか頭に浮かんでこない。しかし、アジアの友邦であるこの国が、独自のビルマ式社会主義政策をとり、自由主義国ではないということを私たちは案外知らない。日本の約一・八倍の広い国土（人口は約三千万人）の隅々まで、黄金のパゴダ（仏塔）が存在する信仰心の篤い人たちが、歴史の変遷を経て、いまもなお、誰しものが仏門に入るといふビルマ人の生活、そこかしこで黄衣の僧侶を見るとき、宗教と社会主義の相克ではなく、共存をこれほどはっきり感じる独特のビルマ式社会主義は、確かに珍しい。そして、この社会主義国を創り上げ、今日この国をリードしているのは、一九六二年、時のウ・ヌー首相を打倒して政権の座についたネ・ウィン大統領その人である。このネ・ウィンをはじめとして、今日のビルマ政府の要人の中には、良きにつけ、悪しきにつけ、かなり日本の影響を受けている人物がいる。一九七五年当時の内閣閣僚は、ネ・ウィン首相（大統領はいなかった）をはじめ、外相、情報相、文化相ら軒並み、日本の陸軍士官学校の留学生が占めており、彼らの出身母体であるビルマ国軍では、今日もなお、旧日本軍歌を国軍の歌として採用しているほどである。これにとどまらず、中興の祖、アウン・サン将軍は、ビルマが日本へ送り出した士官学校第一期生である。不幸にして、独立の前年、一九四七年に同志とともに暗殺された。

ネ・ウィンとアウン・サンという、この国にとって二人の巨人が、ビルマの独立と歴史を大きく動かしてきたのは間違いない。

ビルマにとって長い年月のイギリス支配から独立を勝ちとる潮流のなかで、この二人の英雄が果たした役割と、これに側面から援助を惜しまなかったのが、わが国であったという巡りあわせを無視することはできない。それが今日、ビルマを訪れる日本人観光客のマジョリティをなす大日本帝国の兵隊さんたちとオーバーラップしてくる。

◇ 誇り高い国民性

一九四八年、ビルマがイギリスから独立を勝ちとる過程で、日本が引き起こした大東亜戦争と、これに伴うビルマ進駐が、その独立に加速度をつけたということを指摘する歴史家は多い。

鈴木敬司大佐指揮する南機関の手によって、アウン・サンは、こっそり日本へ舞い戻り、箱根の「紅葉園」で同志たちと、独立運動の構想を練っていた。鈴木大佐は、献身的にビルマの独立運動に協力を惜しまなかったため、今日も当時を知るビルマの人々から敬愛されており、昭和四九年、鈴木大佐の故郷・浜松を見はるかす館山寺の山上で、日緬両国関係者が、記念碑除幕を大佐のお孫さんの手で行い、当時のウ・チ・コーコー駐日ビルマ大使も参列された。私もこの場に居合わせる縁を得ていたが、その時日緬両国間に運命的なキズナを感じた。

今日ビルマは、各国と等間隔を保つ、難しい外交政策を堅持し、特定の国に偏向していない。従って、この国のどこを訪れても、ある特定の国の援助、協力によったプロジェクトは、まったく見られない。わずかな例外は、ラングーンにあるソ連援助のインヤレーク・ホテルぐらいだろうか。

このことは、ビルマ人の誇り高い国民性を示しているといえるだろう。ソ連や中国の援助に頼りすぎ、見返りとして認めざるを得ない彼らの内政干渉を極度に警戒しているようにも受け取れ、決して豊かではない国民生活を考えると、「武士は食わねど高楊枝」流の強い自尊心を窺わせるが、一方でビルマ人の面目が躍如としている爽快さがみられる。温厚である反面、ビルマはこういうプライドとしたたかさも持ち合わせている。ビルマ人の温厚さ、人懐っこさについては、一度ビルマを訪れた人が必ず話題にするのだが、これについては、京都大学会田雄次教授の「アーロン収容所再訪」に詳しい。見知らぬビルマ人とビルマを訪れた日本人の交流については、戦前から枚挙にいとまがない。日本兵とビルマ人女性との間に生れた青年と父親との三〇年ぶりの対面にも、私自身二度ばかり立ち会ったことがある。常に控えめで、男女を問わず、いまでも民族衣装ロンジーをこよなく愛用する‘静かなビルマ人’。その控えめな態度や、奥床しさ、万事はにかみ気味の物腰は、昨今めっきり失われた「日本人らしさ」に思いを巡らす戦前派にとっては、ゾクッとするほど懐かしくてたまらないものだ。古き良き青春時代を、戦争によってメチャクチャにされたとはいいながら、明日をも知れぬ時代に自らの心の琴線にふれたビルマ人の心の優しさは、今日の日本に失われたものだけに、余計懐かしさが募ってくる。

こうしてビルマを訪れる日本人旅行者の大半が、何らかの形で戦跡巡拝に名を借りた、かつての兵隊さんたちなのだ。だから、ひたすら荒れ果てた旧戦地を中心に歩き回る。

ドイツ人、フランス人をはじめ、欧米の旅行者たちとは、この点で決定的に違ってくる。ひとたびベースキャンプのラングーンから中部ビルマへ旅行しだすと、日本人と彼ら欧米

人とは旅行スケジュールがまったく異なり、せいぜいタウンジー、マンダレー、パガンのホテルか、観光場所ぐらいでしか遭遇することはない。日本からの旅行者は、ただひたすら砂ぼこりの未舗装道路を走り、気のきいたレストランもないような町や村へ現れては移動していく。

ビルマの国土は広大である。北は中国、西はインド、バングラデッシュ、東はラオス、タイに国境を接し、南はベンガル湾に臨み、ビルマ人と呼ばれる種族のほかに、数多くの種族が各地に定住し、種族によって言語、衣装、風俗がそれぞれ異なる。現在、ビルマは国内どこへでも行けるわけではなく、政治および治安上の理由から、私たち外国人が訪れることができる地区は、ごく限られている。

ビルマへの入国は、国際空港であるラングーンのスリガドン空港から入る場合以外は、カルカッタ方面からアキャブ空港への入国路と海路から来るわずかの船員の入国程度で、陸路の入国はできない。

◇ 忍耐強い旅が肝要

今日、ビルマの旅行事情は、受け入れ施設、観光資源を取り上げても決して充分とはいえない。その受け入れ状況は、ビルマにメロメロのシンパならともかく、一般の旅行者が、他の国と同じ尺度でこの国を見たら、いかにビルマ人の誠実な人柄に心を打たれ好意的に対応したとしても、まず苦情が出るのは目に見えている。簡単にいえば、今日観光立国として成り立つイタリアやスイスにあること、また整備されていることがまずないと思えば、遠からず当たっている。だから、この国を訪れる旅行者は、忍耐強く我慢することが肝要である。

ラングーン空港に到着すると、入国手続きに約一時間を要する。相当腹がたってきた頃に、もちろんエアコンなしのバスでホテルへ向かう。外貨は、ドル・マーケットと呼ばれる‘DIPROMATIC SHOP’以外まったく使えないこの国では、持ち込んだ米ドルを空港、銀行、ホテルで、ビルマの通貨チャットに両替する。この両替手続きが面倒だし、常に両替申告用紙を携帯しなければならない煩わしさにはいささかうんざりする。ホテルでは一度に多数の人が両替したりすると、手持ちのチャットが底をついてしまうことも度々ある。このために、レートの良いのにつられて闇ドルに手を出す旅行者が時折みられるようだが、絶対やってはいけない。

ラングーン市内には外国人が泊まれるホテルは三軒しかない。団体の場合、一応事前に国営旅行社ツーリスト・バーマ (TOURIST BURMA) を通してホテルの希望を述べることはできるが、お国柄を反映して希望どおりのホテルに泊まれる保証はないし、当日になって突然変更されることもある。観光の手配は一切ツーリスト・バーマがやってくれ、ガイドも専任のガイドをアテンドしてくれる。数年前までは、ビルマ航空 (Burma Airways Corporation、略称BACだが、Union of Burma Airways と呼んでいた当時のUBAの方

が通りがよい) の T I S (Tourist Information Service)の方が幅広く営業していたが、いまはツーリスト・バーマに一本化された。当時、日本語を満足に話すガイドは三人程度だったが、いまや日本語ブームも手伝って、日本語を話すガイドの数も年々多くなり、言葉の障害はあまりなくなった。

しかし、これらのガイドさんのガイドぶりは、どう鼻屑目にみてもいただけない。まだ、観光とガイドの本質というものが、この国の観光行政の当事者にはよく分っていない。聞かれば応える式のガイドで、ただお客について回り、手配をするという旅行手配師の域にある。元兵隊さんのように、三〇数年前とあまり変わっていないビルマの街並みを眺めては懐かしさを感じ、ビルマ人の生活に感傷にふけているだけなら、むしろ余計な言葉は必要ないのかもしれない。しかし、欧米人は説明しないガイドを許してくれず、いつもガイドの質がトラブルの種となっている。従って、ビルマのガイドさんは、優しく、文句も言わず、お土産(チップに非ず)をくれる、同じ肌をした日本人グループの世話をやきたがる。日本人は甘いかもしれない。

◇ 不十分なホテル事情

ビルマ国内で現在訪れることのできる地区は、ラングーン、マンダレー、パガン、ペグー、サンドウエイ、インレー湖の観光地のほかには、北はマンダレー周辺のメイミョー、カレンミョー、モニワあたりまで、東はビルマ国内を縦貫する三つの大河のうち最も東にあるサルウィン河、西はアラカン山系、南はモールメン周辺をひとつの境界と考えてよい。もちろんアキャブのようにアラカン山系以西であっても、空路なら許可されるところはほかにもある。中国国境に近いミッチーナや、ラショオは空港に寄ることしかできない。また、大東亜戦争でつとに知られるところとなったインパール方面、泰緬国境方面は、近づくことさえできないし、このほかにも陸路では旅行することができないところも数多い。

ラングーンのホテルに不満がないわけではないが、他地域のホテルにくらべればまだ良いほうである。一九七二年頃までは、市内中心部にあるストランド・ホテルやインヤ湖(旧ビクトリア湖)畔にあるインヤレーク・ホテルのダイニング・ルームでは、背広にネクタイ着用を義務づけられ、なにかと窮屈な思いとともに、イギリス風の厳しい躰というものを感じたものだが、いまはそれもなくなった。ただ、インヤレーク・ホテルは今日も各国国賓が宿泊し、皇太子夫妻や田中元首相も首相在任時に宿泊した格調高いホテルなので、その辺は承知しておいたほうがよい。

ホテル施設がない地区へ行く場合について言えば、ビルマでも数少ない観光地で、珍しい漁民たちの生活を見ることが出来るインレー湖なら、山の上のタウンジー・ホテルに宿泊することができるし、一二、三世紀の遺跡群の中にあるパガンでは、素晴らしいコテージ・スタイルのティリピサヤ・ホテルに旅装を解くことができる。が、戦跡の地で元兵隊さんの希望するタウンゲー、モールメン、メイクテーラ辺りの宿泊には気を遣う。名ばかりの

ゲストハウスか、寝台車を鉄道駅の引込み線に留めホテル代わりに使ったり、公の施設を使用させてもらう（例えば、タウンゲーでは女子師範学校寄宿舎など）。当たり前のコースでも心身ともに疲れるビルマだが、コースを外れるとハプニングや幸運、相手の好意まで期待するようになる。

ビルマでは大きく分けて乾季と雨季の二つのシーズンがある。ビルマの旅行シーズンは、乾季の一〇月から三月までが望ましい。近年、旅行者が増加したために、特に一月、二月の繁忙期には、国内の移動にバイクアウト、フォッカー、DC-3、ツインオッター等々、日本ではもうお目にかかれないごく限られた数の国内機をローテーションぎりぎりのところで運航しているので、遅れるのはごく当たり前で、時によって半日程度の遅れはざらで、辛抱強く、ひたすら待つ心のゆとりがなければ、とても神経がもたない。

特に、ラングーン・マンダレー間約五七〇kmの往復に、往路は夜行列車、帰路は熱暑の中をバスという難行を強いられることもある。この場合、途中の楽しい田園風景と豊富な果物などを想像して、さらにビルマだからと納得してみてもビルマの人たちと同じように、弁当を手でつまみ、男も女も立ちションを厭わない図太さと体力がないととても耐えられない。

ビルマの人たちの心優しいひとつの特徴は、わりあい人見知りをしていない点だ。贈り物をあげたり、友人を自分の家庭に招待し、家族総出で歓待してくれることだ。そして、大勢の人々と知り合いになり、多くの家庭から招待を受けるようになると、そのうち、観光ビザ期限の一週間程度のビルマ滞在では、ビルマの友人に対して義理を欠くという悩みを抱くようになる。親友をあまり多く持つと苦痛にすらなってくる。ビルマでは派手な夜のお遊びはまったく無縁で、まったく健康的である。テレビの試験放送がやっと始まったばかりで、庶民の楽しみは、映画やスポーツであり、友人と語りながら食事をともにすることである。

◇ 荒野へ出かける意気込みを

治安に言及するなら、国境周辺のゲリラやテロを別にすれば、発展途上国にありがちなスリ、窃盗、置き引き、恐喝などはあまり見られない。このあたりもビルマのビルマらしいところなのだが、やはり油断は禁物とっておこう。

さて、この国も他の国々と同様、一度訪れただけでは表面的なことしか分らず、また、首都を見ただけでは真にその国を理解することは難しい。とりわけビルマについては、荒野でも山の上でも行けるところは、ジープでも、牛車でも、身体を酷使しながらも努めて行ってみようという意気込みが必要である。

日本にも遅れて紹介されたビルマだが、他のアジアの国々とは一味違った「知られざるビルマ」は徐々に仮面を剥いできた。受け入れ施設も少しずつではあるが、改良され整備されてきている。

今日では、急激に思惑以上にツーリストが押し寄せるために、はっきりいって、ツーリスト・バーマの手配を始め、すべての面で後手後手に回り、戸惑いが見られる。

そこで、ビルマを人一倍愛する私としては、彼らの施設に負担をかけないようにするため、従来のように乾季にばかりこだわらず、しのつくような土砂降りの雨季も、ビルマの別の一面を垣間見ることができるという発想の転換から、本格的な乾季の終焉を告げるとともに雨季の始まりを象徴する四月の「水祭り」以降の訪緬も、そろそろ検討する段階にさしかかっているように思う。

いずれにせよ、この国は一口では言い尽くせない味わいのある魅力を秘めた国であり、どんな旅行であってもよい、多くの人に一度は訪れてほしい国である。